

月刊

いじろのよも

第十三卷

二月号

いじろ豊かとは

何をもて

こころが豊かと

言うのかが

分からぬ人の

なんと多きか

役人の規範性喪失

狂牛病が

日本で発生する

恐れを指摘した

EUの報告書を

農水省が

隠蔽していた

という

薬害エイズをはじめ

行政の失態が

続く

役人の規範性の喪失が

めだつ

人生を考え直して

みたい人は（九七）

『正法眼蔵』解説（四一）

仏性の巻を続けます。

第十四祖の龍樹尊者、梵に那伽闍刺樹那（ながありじゆな）と云い、唐に龍樹、亦た龍勝と云い、亦た龍猛（りゅうみょう）と云う。西天竺国（さいてんじくこく）の人なり。南天竺国に至る。彼の国の人、多く福業（ふくごう）を信ず。尊者為めに妙法を説く。聞く者、遍（たが）いに相謂（あい）いて曰く、「人に福業有るは、世間の第一なり。徒（いたず）らに仏性を言う、誰か能く之（これ）を観るや」。尊者曰く、「汝仏性を見んと欲せば、先ず須（すべ）からく我慢を除くべし」。彼の人の曰く、「仏性大なりや小なりや」。尊者曰く、「仏性は大に非ず小に非ず、広に非ず狭に非ず、福無く報無く、不死不生なり」。彼、理の勝れたるを聞きて、悉く初心を廻（めぐ）らす。

尊者、復（ま）た坐上に於て自在身を現ずるこ

と、満月輪の如し。一切の衆会（しゅえ）、唯だ法音を聞くのみにして師の相を觀（み）ず。彼（か）の衆中に於て長者の子迦那提婆（かなだいば）有り、衆会に謂（い）いて曰く、「此の相を識るや否や」。衆会曰く、「而今（いま）、我等目に未だ見ざる所、耳に聞く所無く、心に識る所無く、身に住する所無し」。提婆曰く、「此れは是れ尊者、仏性の相を現じて、以て我等に示す。何を以てか之を知る。蓋し、無相三昧（さんまい）は形満月の如くなるを以て、仏性の義は廓然（かくねん）として虚明（こめい）なり」。

言い訖（おわ）れば輪相即ち隠る。復た本坐に居して、偈を説いて言く、「身を円月の相を現じ、以て諸仏の体を表す、説法其の形無く、用弁は声色（しょうしき）に非ず」。

参考までに、現代語訳として玉城康四郎著『現代語訳正法眼蔵2』（大蔵出版刊）を引用させて頂きます。

第十四祖の龍樹尊者は、サンスクリットではナーガルジュナ<那伽闍刺樹那>といい、唐では龍樹や龍勝といい、また龍猛ともいう。西インドの人で、やがて南インドに行った。かの国の人は多く、人間

の幸福を信じていた。尊者は人々のために妙法を説いた。聞く人たちは、たがいにいうに、「人間は幸福であることが、この世の第一のことである。いたずらに仏性を説いても、だれも見たものが無いではないか」と。

尊者「おまえたちが仏性を見ようと思つたらば、まず我慢を除くべきである」

かの人「仏性は大きいですか、小さいですか」
尊者「仏性は大でもなく小でもなく、広くもなく狭くもなく、幸福でもなく報いもない。ただ不
死不生である」

かれらは、その道理のすぐれていることを聞いて、ことごとく最初の考えをひるがえした。

尊者は、また高座の上で自在身を現わし出した。それはあたかも満月輪のごとくであった。ここに集まつているすべての人びとは、ただ尊者の説法を聞くだけで、その姿を見ることができなかった。その集まりのなかに、長者の子の迦那提婆（かなだいば）という人がいて、人びとにたずねた。

提婆「このすがたを知っているか、どうか」
人びと「ただいま、わたしどもは、目に見ることもなく、耳に聞くこともなく、心に知ること

もなく、身の安住するところもありません」

提婆「これは、尊者が仏性のすがたを現して、わたしどもに示されたのである。どうしてそれが分かるかというところ、無相三昧は、その形が満月のごとくである。したがって仏性の意義は明々白々である」

提婆がいいおわると、月輪のすがたが見えなくなつて、尊者はまたもとの坐禅のすがたに帰つた。そしてつぎのように偈を説いた。

「身は円（まど）かな月のすがたを現わし、
もつて諸仏の本体を表わす。

法を説くにも形がなく、
語るにも声ではない」

先月号と同じで、この部分は、漢文で書かれているのですが、読み下し文のみを載せました。

実は、この『正法眼蔵』の解説を今月号で終わりたいと思つていますので、今月号の取り上げました部分、これまでと異なり、かなりの部分を飛ばして、仏性の巻を一回で終わるのなら、ここは取り上げたほうがよいと、私が判断した部分にしています。

また、この部分は、やはり先月号と同じで、『景德伝灯録』に出ていることの取意文のようです。

さて、本文の解説ですが、この部分はとても難しいようです。読者の皆さんも、多分、本文なり、現代語訳なりを読まれても、おそらく理解を超えているのではないかと思います。その原因の一つは、私から見ますと、第十四祖・龍樹尊者の言ったとされたことを、この『景德伝灯録』に収録する時に、すでに間違っていたことが想定できるのです。

それは、例えば、引用の最後のあたりに出てきます次の言葉に現れています。

「提婆がいろいろおわると、月輪のすがたが見えなくなつて、尊者はまたもとの坐禅のすがたに帰つた」。

これを読みますと、龍樹尊者は、「月輪」の姿と成つていて、それが、また、元の「人間」の姿に帰つたように思われますが、いくら尊者でもその姿・形が月輪になることはあり得ないように思うのです。

では、何をどう取り違えたのでしょうか。

それを説明する前に、まず、龍樹尊者に関して調べておきたいと思います。

このお方は、二世紀中葉から三世紀中葉の人で、前述のようにインドで生まれ、インドでお亡くなりになりました。著書も多数あり、大乘仏教に多大な影響を与えた人で、「八宗の祖」と称されています。実は、真言密教

では、このお方は龍猛（りゅうみょう）菩薩と呼ばれ、真言密教を確立した最初の人とされています。

このお方の著書とされているものに（疑義ありと言う学者もありますが）『菩提心論』というのがあります。それには、次のように書かれています。

「我れ自心を見るに形月輪の如し。何（い）かんが故にか月輪をもつて喩（ゆ）とするとならば、いはく、満月円明の体は、則ち菩提心と相類せり（自分自身で自らの心の本性を観ると、その形はちょうど月輪のごとくである。自らの本性をどうして月輪に喩（たと）えるかといえは、満月の円（まど）かで明るいかたちは、そのまま菩提を求める心と互いに似ているからである）」と。

（弘法大師空海全集第八巻（筑摩書房刊）「菩提心論」九七―一三一頁より）。

この記述からお分かりだと思つのですが、『景德伝灯録』に出てきます「満月輪」とは、実際に龍樹尊者の姿が満月のようになつていのではない、それは、どこまでも尊者の心境のことを言っているのです。私自身の体験でも、それは同様なのです。

実際、この月輪は、密教の瞑想では、とても重要視されています。例えば、密教瞑想法の一つに「月輪観」というのがあります。それは、紙に書かれた満月を本尊と

して、自分がその本尊と一体になる修法（しゅほう）です。また、密教の修法の念誦次第（ねんじゆしだい）の中には、「掌（たなごころ）の中、舌および心（むね）の上に月輪あり」と観想する部分があります。

このように見てきますと、今回取り上げました部分のご理解も、結構、可能なのではないのでしょうか。次に述べます解説を読まれて、もう一度、原文とその現代語訳を読み直してみたいと思います。

では、少しだけ、説明がいりそうな言葉を、取り上げて解説しておきます。

まず、「人間は幸福であることが、この世の第一のことである。いたずらに仏性を説いても、だれも見たいものが無いではないか」という部分ですが、なるほど幸福になることは、とても大切なことだと思います。でも、幸福は、実は、結果であって、それ自体を求めようとしても、とても抽象的で、普遍性のある目標にはなり難いものだと思います。龍樹尊者のおっしゃるように、仏性が現れることの方がどの幸福よりもずっと大切で、それが現れれば自然に安樂が得られ、どんな幸福にも代えがたい幸福が訪れてくるものなのです。それは確かに見えないものなのですが、ですからそう信じて頂く以外にないのです。

次に、「我慢」ですが、これは、現在使われていますような「何かに耐えて辛抱する、自己を制する」といった意味ではありません。それは、煩惱の一つで、自我意識から起こる慢心のことです。

次に、「自在身」ですが、この「自在」は、心境が、他の何にも依存しない、自由自在なことを言うものです。それに「身」がついています。そうした心境にある時の身体のことをいっているのだと思います。

でも、『景德伝灯録』にありますように、その自由自在な心境が、身体に現れたとき、身体が見えなくなったり、満月輪になったりする訳ではありません。おそらく、その身体からは、今風に言いますと、オーラが出ていて、仏さまのように神々しさを感じることはあると思います。こう考えますと、「自在身」は「自在心」とした方がよいのではないかと思うのです。

次に、「無想三昧」ですが、それは、差別の相を離れた三昧の境地です。私の体験で言いますと、自分が本尊と一体になり、満月のような円い宇宙にただ一人存在していて、この世に存在するものすべてに、あらゆる差別がなくなつたという心境です。

これで、道元禅師を終わります。来月号から、お大師さんに移り、『即身成仏義』を取り上げていきます。

自作詩短歌等選

日本のゆううつ

金満国日本の
ゆううつ

みんな
やる気がでない

何に安心を見いだすか

日本人は
他者との
比較の中に
安心を見いだし
欧米人は
神との
関係の中に
安心を見いだす

子への愛と勘違い

子どもへの
執着強める
親たちよ
勘違いすな
自己愛なのに

国益は国家エゴ

国益と
いう名の国家エゴ
みにくし

ついしてしまいう虐待

虐待を
なぜかする母
分からぬ哀れ

現代人の愛欠乏症

動物に
癒してもらおう
哀れさや
人に求めて
得られぬ今は

真の平等とは

民主主義原理では
平等は万人に対する
自由の平等化を
意味する

しかし
真の平等とは
自由と
(自己原理)
統制(規範に従うこと)
との
(他己原理)
平等化
つまり両者を
等しく平かることなのだ

温かさ回復の道

『育児室からの亡霊』
という本の著者の一人
ワイリー女史が
人間のもつ
あたたかさが
失われつつある
だから
親への支援をして
親業の重要性に
目覚めさす
必要がある
と語っている

この人には
人間的温かさの
喪失の原因が
分かっている上に
親業のようなもので
解決できると
考えているが
それは間違い
そんな小手先の
対策ではダメ
人間性そのものの
回復が要る

かっこうを気にする

女の子
みんな太めを
嫌うという
かっこうだけを
気にする今は

法で社会を護る

何事も
法律づくり
規制する
それ以外には
社会まもれず

自己肥大社会の現れ

親と同居する
二十〜三十歳の未婚者が
約1200万人に
のぼるといふ
こうした人は
おおくは
フリーターであり
パラサイト・シングル
であるらしい
日本人の
活力やエネルギーが
だんだんと
失われていく
これも
自己肥大した社会の
一つの現れ

自作随筆選

不妄語戒の不毛さ

一月二十八日付けの毎日新聞の「余録」というコラムにウソについて書かれていました。次のような書き出しで始まっています。

「世の中、どこを向いてもウソばかりだ。本当にユーウツになる。オーストラリア産牛肉を国産と偽装したウソに腹を立てたと思ったら、今度は外務大臣と事務次官が、ウソをついたつかないで情けない泥仕合である。海の向こう米国では、倒産したエネルギー販売最大手のエンロンの壮大なウソが明るみに出た」。

そして、次のような言葉で結ばれています。少し長くなりますが、紹介してみます。

「『ウソは泥棒の始まり』とも『ウソも方便』ともいう。『どっちが本当なの』と言いたくなるが、相手がことわざだから、仕方がない。むしろ、二つのことわざは、人間社会におけるウソのやっかいさを示しているかもしれない。ウソをつくのは個々の生身の人間だ。どんなシステムを作ってもこの人間社会からウソを完ぺきに排除

できないだろう。エンロンの事件はそれを教えてくれている。ウソにもいろいろあることを承知でいえば、この社会を支えるのは、つまるところ個々の人間の誠実さしかない。ウソばかりの世の中に、そんな当たり前前のことを思う」。

皆さんはこれを読まれて何を感じられるでしょうか。私は、これを書かれたコラムニストの方も、やはり、ここで非難されているウソをついた人々と同じ穴のムジナのように思えます。

何故かと言いますと、不妄語戒を含む「ウソも方便」という釈尊の教えを相対化して捉えているからです。

仏教には、誰でもが守らなければならない戒律として五戒があります。それは、不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不飲酒（ふおんじゆ）の五つの戒めです。これらの戒めは、多少解釈の余地はあるとしても、絶対なものです。人間として、人間らしく生きるためには、不妄語戒が戒めますように、絶対に「ウソ」を言うてはならないのです。

この方は、「ウソも方便」を、不妄語戒を破つて、ウソを言うことも許されているように解釈していますが、そうではありません。この教えは、自分の利益のためではなく、相手を幸せにするためなら、ウソを言うことも

許されるとするものです。例えば、癌を告知しなかったり、死に瀕している人に「大丈夫、がんばれ」といって励ますような場合です。

この方が非難していますような、企業のウソや政治家や官僚のウソを「ウソも方便」といって許すものではないのです。自分が利益を得たり、自分の立場を護るためにウソを言うことは厳に戒められています。それは、どこまでも不妄語戒が禁じる通りなのです。

いま、日本人だけではなく、世界中の人が、ウソを平気で言うようになっていきます。そこには、幼稚園児から大臣や大学教授、法曹界の人まで、あらゆる人が含まれています。ですから、この戒律は、全くといっていいほど守られています。

実は、守られていないのは、この戒律だけではありません。五戒の中の他の四つも、多かれ少なかれ守られていないのです。

その中でも、特に目につきますのは、の不邪淫戒です。日本では、世界にあまり例をみない、援助交際と呼ばれる、少女自ら志願して行う売春をはじめとして、テレビや小説をにぎわす女性の浮気は目に余るものがあります。勿論、これを誘う男性が悪いことは言うに及びません。

話が戒律一般に飛びましたが、この方の書かれた結論の部分に戻ります。

この方は、「この社会を支えるものは、つまるところ個々の人間の誠実さしかない」と書かれています。でも、勿論誠実さが不要だとは言いませんが、そんな軽いもので社会が支えられている訳ではありません。

社会は、私の言葉で言いますと、「他己」によって支えられているのです。その根幹は、信仰です。自分の無意識の中に宿っていて、しかも自分を超えているものの力、つまり如来蔵（あるいは神）を信じることなのです。それは、絶対な他者です。この絶対な他者への帰依（信仰）なくして根本的に社会秩序を維持することは、不可能なのです。それが人を信じることにつながり、人にたいては誠実になることにつながっているのです。

人間は、単に意識して「誠実になろう」と思っただけで済むものではありません。もっと根本的な次元である信仰を持たない限り、簡単にそうなるものではないのです。そうした信仰に基づいて、「自分を制して」他者をたてようと心掛けるとき、はじめて他者に対して誠実になれるのです。

実は自分を制することが、「あたま」で考えて、できることではないのです。そこには修行がいるのですが。

釈尊のごとば（一〇八）

法句経解説

（三四九）あれこれ考えて心が乱れ、愛欲がはげしくうづくのに、愛欲を浄らかだと見なす人には、愛執がますます増大する。この人は実に束縛の絆を堅固たらしめる。

愛欲が何かにつきましては、すでに何度も出てきましたから、復習はしません。それは、煩惱と言ってもよい広い意味を含んでいます。

この偈にありますように、かつては、煩惱は滅すべきもの、あるいはそれへの執着を断つべきものと、されましたが、いまやこの民主主義・資本主義社会の下では、煩惱の追求こそが人びとの生き甲斐となっています。

どのようにして自分の煩惱（利益と選好）を最大にしたらいのか、財界人はもとより、政治家、官吏など中心となって日本を動かしている人たちははじめ、日本中の（いな、世界中の）大多数の人たちが「あれこれ考えて心を乱し、愛欲をはげしくうづくさせている」のです。そして「愛欲を浄らかだと見な」してきます。

ですから、現代人では「愛執がますます増大」し、そ

して、ますます「束縛の絆を堅固たらしめ」ているのです。つまり、その欲望（煩惱）の炎によって自縄自縛に陥っているのです。そして、他者に対して無関心（無責任）になり、たとえ他者が自分に比べてどれほど貧乏であろうと、無視し、見殺しにします。もっといいますと、そうした人からでも、何かこちらに得るものがあれば、徹底して収奪しようとしています。それが、今の国際社会であり、また、一国の中でもおこっている事なのです。

いま、日本は深刻なデフレに見舞われていますが、この社会を活性化するために、ますます自由な競争を煽り、強者がますますその強者ぶりを発揮できる世の中になければならないと、アメリカをお手本にして進もうとしています。野党・与党、いくつも政党がありますが、この原理や主義を逃れているものは一つもありません。

したがって、この偈は、現在では全く死語となっ
ているだけではなく、逆が行われていると言えるのです。釈尊が説かれていることは、絶対の真理です。その真理が、無視されている、いな、その逆が行われている、ということとは、正法、像法、末法を通り越して、無法に陥っているということだと思ふのです。いつも言っていることですが、このまま行けば、人類が滅亡するのもそう遠くないということではないでしょうか。

(三五〇) あれこれの考えをしずめるのを楽しみ、つねに心にかけて、(身体などを)不浄(きよからぬもの)であると観じて修する人は、実に悪魔の束縛の絆をとりのぞき、断ち切るであろう。

一つ前の偈(三四九)に「あれこれ考えて心が乱れ」とありましたが、ここに出ています。「あれこれの考えをしずめるのを楽しみ」とは、その反対です。どう利益と選好を最大にしようかと「あれこれ考えて心が乱れ」ているのが、現代ですが、この偈では、そうした「考えをしずめるのを楽しむ」ことを心がけよ、と諭して下さっています。

私は、かつて「ひびきのさと」の訓言として 専心勤労、質素儉約、他心感応、聖道修証の四つを揚げましたが、前の二つは、働くには専心勤労で、また、消費は出来るだけ質素儉約に心がけていこう、という戒めをうたったものです。また、他心感応は、人さまとこころを通わせて、人さまのことを考えていこう、というものです。これは、利益と選好を最大にしようという考え方は、まったく異なったものです。それらは、ここに出ている偈に一脈、通じるものがあると思います。

この偈の後半の「身体などを不浄であると観じて修する人は、実に悪魔の束縛の絆をとりのぞき、断ち切るであろう」を読みますと、私は、キリスト教の聖パウロのローマ人への手紙を思い出します。それは要するに、わが精神には神が宿っているのに、肉体に悪魔が宿っていて、その悪魔が私に悪をなさしめる、というものです。

釈尊は、この偈で、私たちが宿している生への強い執着(最大の利益と選好の追求)を「身体などを不浄であると観じて」と述べられ、その執着を制すべく「修する(修行する)」「人は、「実に悪魔の束縛の絆をとりのぞき、断ち切るであろう」と述べておられます。つまり執着の強さを「悪魔の束縛の絆」にもたとえられて、それを断ち切るには修行があることを説かれています。

聖パウロは、イエス・キリストを深く信じていました。しかし、イエスの勧められた修行はしていなかったように、その為に、前述のことばが出たと思います。実は、肉体に宿った悪魔の束縛の絆を断ち切るには、修行以外にはないのです。こころを磨く修行がいます。それは、ヨーガであり、瞑想であり、坐禅であり、読経であるわけです。そうしているときだけ、人間は、欲望の虜から解放されるのです。しかし、現代人には、その大切さが、全く理解できないようですが。

後記

一、近所の梅の花が満開になっています。徐々に春が訪れているのだと感じています。

二、インターネットに「ひびきのさと」という私の研究室のホームページを開設しましたことは、先月号および先々月号で紹介させて頂きました。その内容なのですが、その中に、「一週間ないし十日間ぐらいの間隔で、「ひびきのさとだより」を載せさせて頂いています。それは、多くは、新聞記事などで感じたことを述べたものです。インターネットをなさっている方は、そちらもご覧いただければと思います。

三、最近、小泉総理が方針を変更したのか、デフレ対策（＝景気回復あるいは景気悪化阻止）を最優先課題にすると言いました。私は、最初からこんなに景気が悪くなってしまう、大会社さえが潰れているのに、果して構造改革ができるのか疑問に思っていました。小泉さんが総理になった当初に言っていた「構造改革なくして、景気回復なし」というのは、どうも、私が見たとおり、順序が逆だったようです。森総理もころころ方針が変わりましたが、その仲間の小泉総理も、それを受け継いでいるようです。もっとも、誰が総理になっても、確固たる哲学や信念（信仰）がある政治家がいるわけではないわ

けですから、猫の目のように政策が変わっても、何も不思議はないということでしょう。それにしても、「日本危うし」という感がしてなりません。

四、私は、農業には強い関心をもっているのですが、最近、とても気になるテレビ番組を見ました。それは、北海道では、毎年、二十％程度の水田をもっている農家が、五百軒単位で離農しているという報道です。新農基法では、大規模農業の目安として、二十％を設定していたのではないかと思うのですが、それが、制定数年で、もう破綻を来すとは、私の予測通りとはいえ、余りに早すぎます。なお離農した農家の借金は不良債権化しています。

月刊 こころのとも 第十三巻 二月号 (通巻 一四六号)	平成十四年二月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（よ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

